

(鹿屋市大浦町榎田下)

位置と環境

遺跡は、大隅半島最高の峻険な地形を呈する山々の裾野にあり、市街地より北西へ約3km離れた国道220号線沿いの標高約72mを測る広大なシラス台地上の一角に位置する。

調査区の東側では、肝属川の支流と水量豊富でない西谷川が高隈山系より蛇行しながら流れ込み、河川の周辺には浸食によって形づくられた狭隘な谷底平野が発達し肥沃な田地を作り出している。

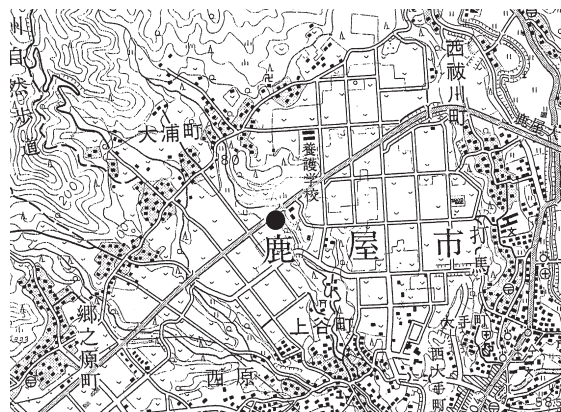
同遺跡周辺には、大浦遺跡・中ノ原遺跡などが所在する。

調査の経緯

国土交通省大隅工事事務所は、鹿屋市大浦・郷之原地区の一般国道220号鹿屋バイパス建設工事に伴い、計画路線内の遺跡の有無について県教育委員会に照会し、昭和59年に分布調査を実施したが調査不能の状況で遺物は確認されなかった。しかし、昭和60年の生産芝剥ぎ取り作業に伴う確認調査で土器片の散布を認めた。その結果に基づいて同年本調査を実施した。

遺構と遺物

昭和60年と昭和61年の調査では、池田降下軽石層の上に二時期の包含層の存在を確認し、さらにアカホヤ火山灰層の下層から縄文時代早期の特徴を有する土器片を発見した。中でも前者の限定された層の

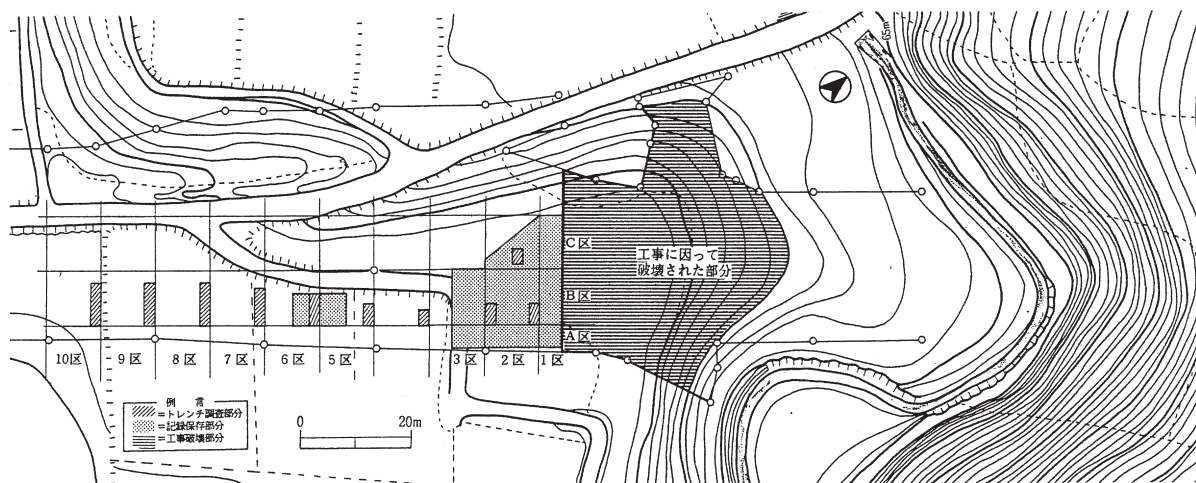


第1図 榎田下遺跡の位置

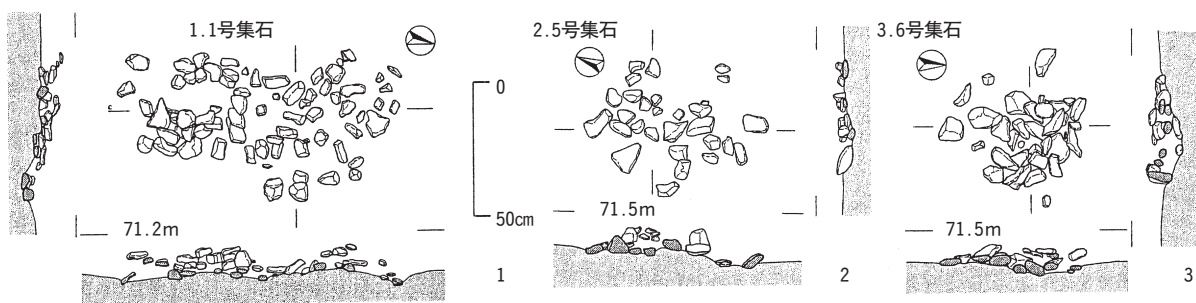
上部から縄文時代後期の遺物、下部では縄文時代前期の遺構・遺物が発見された。

縄文時代前期の遺構は、調査区の先端部から中央部にかけて集石6基が検出された。共伴する遺物は少ないが、遺物の層位的な出土状況から前期に該当すると考えられる。

集石の形態は、80×140cmを測る大きい楕円形のプラン（第3図1）のものから、70×90cmを測るもの（第3図2）、50×60cmを測る円形プラン（第3図3）のものなどほぼ3分類できる。礫の総数は22個のものから73個を数えるものまであり、それぞれ加熱を受けたと思われるものが多い。その集合は、まとまりを持って集中するものから、ばらつきのあるものである。石の大きさには、小さな礫や拳大のもの、ほかに乳幼児の頭大ほどのものもある。これらの礫片は、いずれも平面的に置かれた状況であるが、下部施設の中央部付近に若干凹むという特徴



第2図 遺跡の地形図及びグリッド配置図



第3図 集石

を持つ遺構も3基ほどみられる。

縄文時代前期の土器は、轟B式土器（第4図1）に比定できる土器、轟A式土器（第4図2、3）の範疇に属するものと考えられるもの、曾畑式土器（第4図4、5）に属すると考えられる土器も出土している。

縄文時代後期の土器は、阿高式土器（第4図6）の系統に酷似するもの、指宿式土器（第4図7）に比定されるもの、磨消縄文土器の影響下にあると考えられる土器（第4図8）、さらに市来式土器（第4図9）の範疇に入ると考えられる土器等が出土している。

縄文時代の石器は、層序関係から時期差や形態差を捉えることは不可能であった。出土石器には完形品から未完成品までの202点を数える石鏃（第4図

10）、石斧（第4図11）、石皿（第4図12）、磨石・敲石・石弾・凹石等がある。そのほかに円盤形土製加工品、棒状手捏ね土製品、円盤形の穿孔のある石製加工品等が出土している。

特徴

狭い調査範囲にもかかわらず、多数の石鏃が発見できたことは注目され、当時の生活様子を知る上で貴重な資料である。

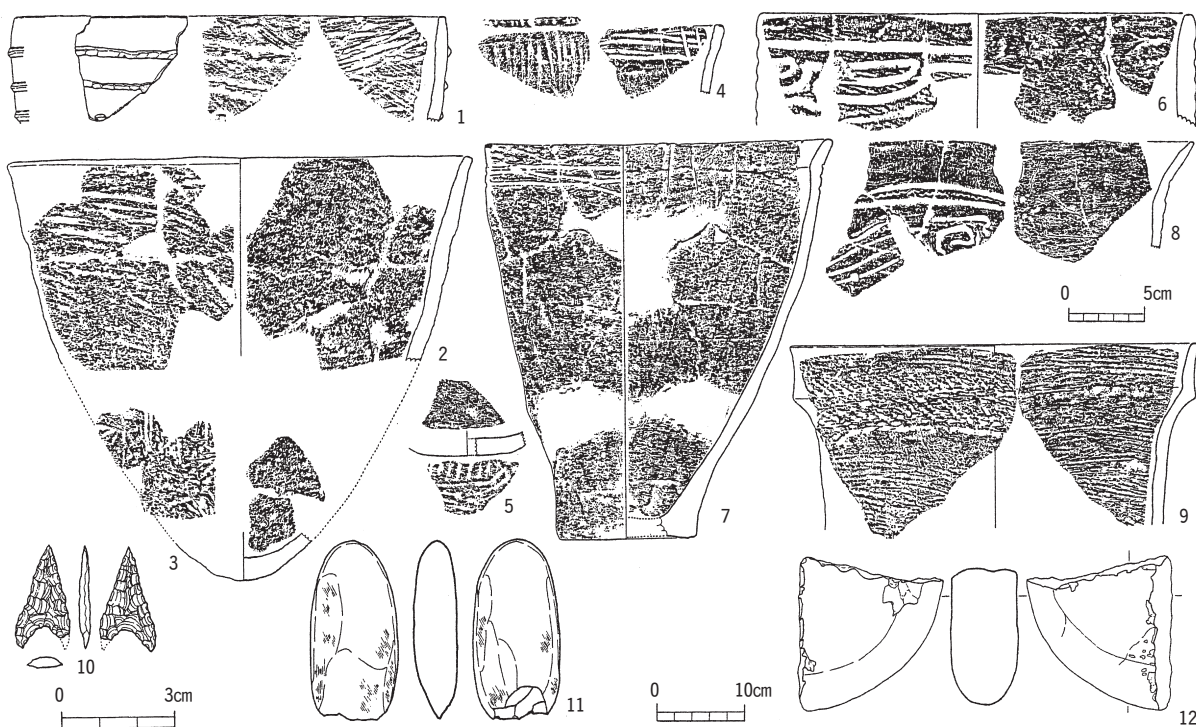
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1989「榎田下遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』48

（山口俊博）



第4図 出土遺物